

博士学位論文審査要旨

氏名	瀧上 貴由樹		
学位の種類	博士（工学）		
学位記番号	博乙第 65 号		
学位授与の日付	2023 年 3 月 9 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
学位論文の題目	日本近代における 2 階建て独立住宅の理念形成と平面形式の成立に関する研究 -戦前期に刊行された住宅書を主史料として-		
論文審査委員	主査	神奈川大学 教授	内田 青蔵
	副査	神奈川大学 教授	曾我部 昌史
	副査	神奈川大学 教授	中井 邦夫
	副査	神奈川大学 教授	山家 京子
	副査	日本工業大学 教授	安野 彰

【論文内容の要旨】

わが国近代における独立住宅の変化の特徴の一つに、住宅の2階化があげられる。これまでの住宅史研究において、近代における2階建て独立住宅の普及については概説的に述べられるに留まり、当時の2階建て独立住宅の変化の様子、とりわけ平面に関して詳細な検討は行われてこなかった。そこで本研究は、日本近代における2階建て独立住宅の理念形成と平面形式の成立過程を明らかにすることを目的としている。

研究の方法として、明治後期から昭和初期までに刊行された住宅書128冊を主史料とした。住宅の2階化の要因にあげられる「住宅の平面の機能分化」と「住宅の敷地面積の不足」の2点を分析視点に用いながら、住宅書の言説と平面図から2階建て独立住宅に対する理念と平面形式の成立の様子を分析し、住宅平面の2階化に導く思考とその背景の解明を試みている。

本論文の構成とその内容は以下の通りである。

第 1 章では、居間・客間・寝室の配置に関する記述が確認できた 63 冊の住宅書を分析し、1 階居間の変化に伴う客間と寝室の 2 階配置に対する言語化の形成過程を示している。まず、大正 4 年頃、大正 10 年頃、と段階的に居間の機能が「私室」から「家族共用」に変化し、住宅観も「接客本位」から「家族本位」へ移行する過程を示している。これに伴い大正 8, 9 年において、従来まで 1 階南面側が優先されていた客間がその位置を居間に譲る形となり、客間の 2 階配置の言説が形成され、続いて大正後期～昭和初頭において、居間の記述内容に椅子座化した「リビングルーム」の機能が出現することで就寝機能が分離する形となり、寝室の 2 階配置の言説が形成されたことを明らかにしている。

以上から、複数の機能包含を許容していた在来の部屋概念に対し、平面の機能分化と2階平面に客間や寝室の配置の余地を見出す建築家らの姿勢が読み取れ、こうした動きを通して戦前期における2階建て独立住宅の理念が形成されたことを明らかにしている。

第2章では、平面図の掲載が確認できた100冊の住宅書から1,103例の2階建て独立住宅の平面図を抽出し、その「座敷」の動向に着目した。2階建て独立住宅における座敷の有無および設置階、座敷の用途との対応関係を通時的に読み取ることで平面の機能分化の様子を明らかにしている。

その結果、1,2階双方の座敷を客間とする旧来的な提案は大正中期から漸減し、大正後期～昭和初頭にかけて1階座敷が居間、2階座敷が客間、と用途が明確化する傾向を明らかにしている。また、大正中期～昭和初頭の生活改善運動を一つの契機として、座敷を2階だけに残して接客用に特化する傾向と、2階を家族用寝室とする傾向に2分化されることを示している。とりわけ前者では1階応接間（椅子座）の増加傾向がうかがえ、公私不明瞭なる旧来的な間取り方法からの脱却と、起居様式による和と洋の差異化を含めた上下階の接客機能の分配方法の進展として読み取れることを明らかにしている。

第3章では、住宅の上下階を繋ぐ唯一の存在である「階段」に注目した。階段に関する言説と平面図の双方から階段の形状と配置方法の理論形成について分析し、平面の機能分化にもとづく2階建て独立住宅の平面形式の成立過程について明らかにしている。

階段に関する言説の分析からは、2階が「接客用ならば玄関側に」、「家族用ならば玄関を經由しない通路側に」と、2階用途に配慮した階段の配置方法が昭和6年以降に言説として出現することを明らかにしている。その一方で、995例の平面図を用いた分析からは、以上のような階段の配置方法が言説化する以前から既に住宅平面として提案化されていたことを指摘している。こうして2階用途にもとづく階段の配置方法が言説として出現する時期と実際に平面に反映される時期との前後関係から、2階建て独立住宅の理念をかたちづくり、実際の平面として成立させるための計画理論の登場までの過程として読み取れることを明らかにしている。すなわち、2階建て独立住宅の平面に対する計画理論の枠組みに、階段の配置方法の配慮が言語化して組み込まれた昭和6年を以て2階建て独立住宅の平面形式の完成と位置づけている。

第4章では、敷地規模と立地に関する情報を整理し、2階建て独立住宅に対する理念との関係からその平面形式の展開の様子を明らかにしている。

住宅書における「敷地の広さ」の記述は「建坪の3倍から5倍」のゆとりある敷地を確保しやすい郊外居住を理想とする傾向が読み取れた。そのため「狭い敷地」から2階建てに導くような考え方は大正中期の一部の言説に限られ、実際に、昭和以降の平面図では郊外立地の提案が増加し、2階建ては平家建てと同程度の数量が掲載されていたことを示している。このことから、2階建て独立住宅の理念は、単に敷地の狭さに規定されるような過程とはならず、むしろ敷地の制約を受けずに2階建て独立住宅のあり方を比較的自由度の高い条件のなかで考案されたことを指摘している。以上の条件下での平面図では、第3章で位置づけた2階建て独立住宅の平面形式の原則を基本としながら、敷地の拡大に伴い玄関からみて1階居間の奥部分に居室配置の選択肢が与えられる傾向にあることを示唆している。こうして敷地と住宅の規模による2階建て独立住宅の平面形式の展開の様子について明らかにしている。

結論では、日本近代における2階建て独立住宅の理念形成と平面形式の成立についてまとめている。すなわち、2階建て独立住宅に対する理念を形成するうえで、大正中期における在来住宅批判とその改善に向けた取り組み、そして大正後期～昭和初頭における生活改善運動による影響が重要な過程であったことを示し、その後の昭和6年において、客間と寝室の2階配置方法にもとづく2

階建て独立住宅の平面形式が完成に至ったことを明らかにしている。

以上の結論をもとに、2階建て独立住宅の変遷過程を近代から現代まで連続的に捉えるならば、戦後から高度成長期にかけて一般的な普及をみせる2階建て独立住宅の平面、とりわけ2階を家族用寝室に据えることを基本とした今日的な平面のあり方に通ずる理念は、戦前期に概ね完成されていたと解釈できることを論じた。

【論文審査の結果の要旨】

わが国近代における独立住宅の変化の特徴のひとつに、住宅の2階化があげられる。これまでの日本の住宅史研究において、近代における2階建て独立住宅の普及については、概説的に述べられているにすぎず、当時の変化の様子、とりわけ平面に関する変容過程などの歴史的な検討は行われてこなかった。そこで、本研究は戦前期に刊行された住宅書を主史料とし、掲載されている言説と平面図の分析を通じ、わが国近代における2階建て独立住宅の理念形成と平面形式の成立過程について明らかにしたものである。

すなわち、2階建て独立住宅の理念形成の上で、大正中期の在来住宅批判、大正後期から昭和初期の生活改善運動の展開の中で、居間の「私室」から「家族共用」への変化とともに南面配置の客間と居間の配置位置の変換、また、居間から就寝機能を分離させ、寝室を2階へ移動させる主張が行われ、大正8・9年頃には客間の2階配置の考え方が言説として出現したことを明らかにしている。

また、大正後期から昭和初期において1階を居間、2階を客間とする言説が定着する中で、平面図では、座敷を2階に置いて接客用に特化するものと寝室を置いて家族用に特化するものに2分されることを示した。また、階段については、2階建て独立住宅の計画理論として、階段の配置方法が言語化される昭和6年を以て、2階建て独立住宅の平面形式が完成したと考えられることを明らかにしている。

最後に、2階建て独立住宅の形成過程において、敷地の狭さや立地から規定されるような動きはなく、むしろ自由に住宅のありようを追求する中で2階建て独立住宅が議論されてきたことを指摘している。

以上、本研究は、伝統的住宅が接地型の平屋住宅であったのに対し、明治以降、徐々に普及し始める2階建て独立住宅の成立過程を明らかにしたもので、また、扱った主史料も膨大なもので、そのデータを丁寧に分析した労作といえる。今日では当たり前の姿となった2階建て独立住宅の誕生過程を明らかにした研究は、わが国近代住宅史研究に寄与するところが大きく、今後の発展が大いに期待されるものである。このことから、本論文は、学位論文としての価値を十分有するものと判断できる。